第３学年　国語科学習指導案

１　単元名　物語をしょうかいしよう

～題名や場面をもとに、心の動きを読みましょう～

２　単元の目標

〇登場人物の心の変化を、言葉に基づいて考えようとしている。（関心・意欲・態度）
〇物語の流れやエピソードの構成から、登場人物の思いや考えを考えることができる。（読むこと　ウ）
〇作品に仕掛けがあることに気付き、作品の面白さを味わう。（読むこと　ウ）
〇クライマックスや叙述の流れから、行間を豊かに想像し、友達と考えを交流できる。（読むこと　オ）
〇読み取ったことをもとに、「わすれられないおくりもの」を紹介する掲示物を書くことができる。（書くこと　ア）

３　評価規準

国語への関心・意欲・態度	読むこと	書くこと
〇登場人物のキャラクターと物語の筋の流れを関連付けながらよもうとしている。	〇あなぐまの死を前後して、森の仲間たちの心情の変化とその理由を想像しながら読むことができる。（ウ） 〇言葉の表す意味を、他の言葉と比べながら考えようとしている。 〇あなぐまの死への悲しみが消えて行くことについて、友達と考えを交流しながら作品を味わおうとしている。（オ）	〇図書室前掲示板に掲示するために、学習してわかったこと、面白いと感じたことが１・２年生にも伝わる文を書こうとしている。（ア）

４　学習材

「わすれられないおくりもの」　スーザン=バーレイ　文・絵　小川仁央訳

小学３年生の発達段階を考え、いろいろな作品にふれさせるのではなく、過去に学習した教材の読み方を参考にさせたい。いくつかのエピソードがある物語として、「大きなかぶ」「きつねのおきゃくさま」などが想起できるとよい。物語について、自分の考えを友達と交流しながら、読みの方法を身に付けるようにしたい。

「アナグマさんはごきげんななめ」「アナグマのもちよりパーティ」は、同じシリーズなので、手に取って読める環境にしておきたい。

５　単元について

「わすれられないおくりもの」の作品のテーマは、「大切な仲間の死を受け入れる」ということである。あなぐまは死んでしまっても、あなぐまから教わった知恵や様々なことは残る。森の仲間たち一人一人に残された「たからもの」を語り合うことで、いつでも、どこでも、だれと会っても、あなぐまの思い出に出会えることに仲間たちは気付く。死んでしまったあなぐまの思い出を共有することで、ずっとそばにいてくれるように感じることができたのである。一人一人の「たからもの」が、森の仲間たちへの「わすれられないおくりもの」へと変わるのである。そう感じたとき、あなぐまの願いであった「友達が悲しまないように」できたのである。あなぐまの「心はのこ」るという思いの意味がはっきりする。もぐらがあなぐまに「お礼をいいたく」なったのは、いつでもすぐ近くにあなぐまを感じることができるようになったからなのであろう。

（１）教材について

この教材で子どもたちに考えさせたいポイントを次のように考えた。

・あなぐまの願いは、あとに残した友達が悲しまないようにと、自分の死よりも、友達のことを尊重するのはなぜ？
・あなぐまが死んでしまうが、死を怖いもの・嫌なものとして思っていないのはなぜ？
・残された友達は、あなぐまの死と重なるように、冬が来る。冬は動物たちにとってどんな季節なのか？
・春になり、あなぐまの思い出話を語り合うが、４つの話が取り上げられているのはなぜか？
・「たからもの」→「あなぐまがのこしてくれたもの」→「おくりもの」と変化しているのはなぜか？
・もぐらが、最後にあなぐまといたおかで、あなぐまにお礼を言うのはなぜ？

（２）クライマックスに着目することで「主体的、対話的、深い学び」を創る

よく、物語の好きなところに着目して学習をするような指導が一般的な風潮であるが、それには反対である。ある意味主観的で、話し合いにならない。「そう感じたなら、そうなんだ」になってしまう。

クライマックスはどこかという視点で物語を俯瞰すると、筋の流れを考えたり、主要な登場人物の思いの変化を粗々つかんだり、物語の仕掛けが見えてきたりする。「主体的、対話的、深い学び」を実現させる手段となる。

前述の疑問については、「クライマックスはどこか？」という話し合いの中で見つけていくことになる。クライマックスを、はじめは「あなぐまが死ぬところ」と考える子が多いが、「きつねが悲しい知らせ」をするところに代わり、冬にもぐらが悲しんでいるところへと移っていく。更に、もぐらがあなぐまにお礼を言うところへと意見が変わるが、あなぐまの思いが実現し、森の仲間たちが悲しまないようになるのは、あなぐまの思い出を語り合うところだと気が付く。つまりこの物語は、あなぐまの死を乗り越えていく森の仲間たちの再生の物語であると気が付く。

一人一人にとっての「たからもの」だった思い出が、語り合うことにより「(豊かな）のこしてくれたもの」となり、一番悲しんでいたもぐらにとっても「おくりもの」となる。

あなぐまが、友達を悲しませないようにと願ったことも成し遂げられる。

（３）学習活動について

言語活動としては、グループの話し合いを通して読み深め、クラス全体で話し合いながら物語の謎を解いていくことである。

話し合い活動としては、二者択一をする議論をするもの（一問一答型）と、全員でいくつもの考えをつないでいくもの（一問多答型）と、二種類の話し合い方をする。クライマックスの決定では前者を、エピソードの読みでは後者を使って、話し合い活動を進めていく。

「大きなかぶ」「きつねのおきゃくさま」などの学習で、出てくる人物の順番や、エピソードの発展性について学習している。

これに深くかかわるのが、動物たちの４つのエピソードである。もっと多くの話がされたと考えるのが妥当であるが、物語では４つのエピソードだけしか取り上げられていない。それはなぜか？そこが物語の肝である。４つのエピソードが何かを代表していると考えてみよう。すると、子どもの遊び、スポーツから身だしなみ、毎日の仕事へと変化している。また、教わった時期を考えると、ずっと以前から最近まで、季節も挿絵から推し量れる。秋、冬、春や夏、そして一年中のことになる。場所も、木陰や池、部屋の中と様々である。動物たちの周りには、いつでも、どこにでも、だれにでも、あなぐまの思い出があることを共有するのである。

６　指導計画　（９時間扱い）

次	時	学習内容と活動	指導と評価（◆）
第1次【表層のよみ】	1	○題名について話し合い、どんな話か 想像する。 ○範読を聞き、初発の感想を書く。 ○一番心にのこった言葉や文に着目して感想を書かせる。	◎挿絵からも、あらすじや登場人物について想像させる。 ◎感想は、①気になる人物②心に残ったこと③クライマックスはどこか④わからないこと⑤気が付いたこと、の中から書けるものを書く。 ◆自分の感想を書いている。
	家庭学習	○音読練習をする。 ○意味の分からない言葉、読めない漢字をチェックする。	◎振り仮名が必要な児童は、少人数指導の先生にお願いする。
	2	○初発の感想文を読む。 ○クライマックスはどこか個人で考える。	◎感想の傾向を説明する。 ◎クライマックスは、「あーんパンチ」のところ。一文にする。 ◆クライマックスを探している。
家庭学習		○音読練習をする。 ○クライマックスはどこか個人で考える。	◎音読カードを利用して、10 回は読んでおくようにする。 ◎クライマックス候補は数か所あってもよいことを伝える。
第二次【深層のよみ】	3	○クライマックスがどこか、クラスで話し合って決定する。	◎いくつかの候補を班で選び、話し合わせる。二択になるように分類し、議論がかみ合うようにする。 ◆自分の考えを述べている。
	4	○前話を読む。 ○あなぐまの人柄や生き方について考える。 ○あなぐまの死ぬ描写を読む。 ○なぜあなぐまは「長いトンネルのむこう」と書いたのかを考える。	◎あなぐまの人柄が表れている言葉や文に着目させる。 ◎「死」に対して心の準備ができているあなぐまの様子を表す言葉や文に着目させる。 ◆あなぐまの人柄や死に対する考え方を読み取っている。
	5	○あなぐまの手紙を読む友達の様子を読む。 ○冬の訪れと友達の深い悲しみを読む。	◎挿絵を手がかりにして動物たちの気持ちを考えさせる。 ◎冬の情景と森のみんなの悲しみとを比較しながら読み取らせる。 ◆森のみんなの深い悲しみを読み取っている。
	6（本時）	○あなぐまの思い出を語り合う友達の様子を読む。 ○なぜ４つのエピソードなのかを、違いを探しながら考える。	◎動物ごとの思い出を、違いを探して考えさせる。 ◆友達の考えのよさに気付いている。
	7	○あなぐまの残していった「わすれられないおくりもの」について考える。	◎「たからもの」「のこしてくれたもののゆたかさ」から「おくりもの」と変化しているわけを考えさせる。 ◆「わすれられないおくりもの」の意味について考えをもっている。
第三次【発展】	8	○物語の紹介掲示を作るための文章を書く。	◎図書室前掲示のため、１・２年生でも読めるものにする。 ◆相手意識をもって書いている。
	9	○カットを入れて紹介掲示を完成する。	◆学習したことを取り入れて掲示物を作っている。

7　本時の指導　（６／９）

（１）本時のねらい

○４つのエピソードの違いを考えながら、あなぐまの死の悲しみが消えて行ったことを読み取ることができる。

（２）展開

学習内容と活動	指導と評価
1　本時の場面を確認し音読をする。	○教科書 P. 120 の４行目から P. 124 の５行目までを音読させ、本時で扱う場面を確認する。
2　あなぐまの思い出を語り合う友達の様子を読むことを知り、だれのどんな思い出なのかを確認する。	○挿絵を掲示し、もぐら、かえる、きつね、うさぎのおくさんの順も確認する。 ○分かりやすい問なので、発言をしなさそうな子どもを優先的に指名する。
3　どうして「４人の思い出の話であなぐまが死んだ悲しみは消えた」と書いてあるかを考える。	○もっといろいろな話があっただろうことが考えられれば良い。ただし、取り上げられているエピソードは４つだけである。この４つのエピソードがその他の話を含め象徴的に取り上げられていることを知らせる。
なぜ４つの思い出で悲しみが消えて行ったのかを、違いを探しながら考えよう。	
4　４つのエピソードの違いについて、どういう点に着目するかの例を聞く。	○もぐら、かえる、きつね、うさぎのおくさんの年齢について考えさせる。もぐら、かえるは子どもであり、きつね、うさぎのおくさんは大人であることが分かる。
5　４つのエピソードの違いについて個別に考え、１つでも違いが見つかったら赤帽子をかぶる。 【個別に読む時間は３分間程度】	○動物ごとの思い出を、違いを探して考えさせる。違いは５つ以上あることを伝える。 ○書かれていることや挿絵を参考にさせる。 ○グループ全員が帽子をかぶったら、グループの話し合いを始める。
6　グループで話し合う。【３分間程度】	○意見が少ないグループにはヒントを与える。 ○以前か最近か、男女、季節、場所、遊びと仕事、毎日とたまに、などの違いがある。グループごとにヒントは変えておく。
7　クラスで話し合う。	○いくつ見つけられるかを目標にするよう仕向け、同じ意見も重複して発言してよいことにする。また、話し合っているうちに気付いたことも発言する。 ◆友達の考えのよさに気付いている。
8　出てきた違いについてまとめる。 あなぐまの思い出は、子どもにも大人にも、男にも女にも、いろんな季節にも、遊んでいても仕事をしていても、森のいろんな場所に溢れている。 いつでもどこでも誰とでも、あなぐまの思い出があるから、悲しみは消えて行ったのだろう。	○知恵や工夫で助け合えたことも押さえたい。 ◆４つのエピソードが森の仲間たちの様々な思い出を代弁していることを理解した。
9　次時は、「たからもの」→「あなぐまがのこしてくれたもの」→「おくりもの」と変化しているのはなぜか？について考えることを伝える。	